ア

アー　（～言う，～した）→61
アー　（～は行かない，～だこうだ）→76, 86a　〖感〗（～驚いた）→66
アーカイブ，アーカイブ　archive →9
アークトー　arc 灯 →14
アーケード，アーケード　arcade →9
アース　earth →9
アーチ　arch →9
アーチェリー　archery →9
アーティスト，アーティスト　artist（**ティ**は**チ**とも）→9
アート　art →9
アートシ　art 紙 →14
アートフラワー　art flower〔和〕→16
アーム，アーム　arm →9
アーメン，アーメン　amen〔ヘブライ〕→9
アーモンド，アーモンド　almond →9
アイ　藍 →1　間，合 →2　愛 →6
アイアイ，アイアイ　藹藹（和気～）→58
アイアイガサ　相合傘 →12
アイアン，《新は **アイアン**》　iron〖ゴルフ〗→9
アイイク　愛育 →8
アイ(・)イレナイ　相容れない →91, 97, 98
アイイロ　藍色 →4
アイイン　合印，愛飲 →8
アイウエオ →17
アイウエオジュン　あいうえお順 →14
アイウチ　相打ち，相討ち →5
アイ(・)ウツ　相搏つ →91, 97, 98
アイエイチ，アイエッチ　IH＜Induction Heating →16
アイエムエフ　IMF＜International Monetary Fund →16
アイエルオー　ILO＜International Labor Organization →16
アイエンカ　愛煙家 →14
アイエンキエン　合縁奇縁 →99
アイオイ　相生 →5
アイカギ，《古は **アイカギ，**もと **アイカギ**》　合鍵 →5b
アイカタ，《古は **アイカタ，アイカタ**》　合方，相方 →5
アイガモ　合鴨 →5
アイカワラズ　相変らず →67
アイカン　哀感，哀歓 →8
アイガン　哀願，愛玩 →8
アイキ　愛機，愛器 →7
アイギ，アイギ　合着 →5
アイキドー　合気道 →14
アイキャク　相客 →8
アイキュー　IQ＜intelligence quotient →16
アイキョー　愛敬 →8
アイキョーゲン　間狂言 →15
アイキョーシン　愛郷心 →14a
アイキョーモノ，アイキョーモノ，アイキョーモノ　愛敬者 →12
アイクチ，アイクチ，《古は **アイクチ，アイクチ**》　合口〖刀〗→5b
アイクルシイ★　愛くるしい →54
アイケン　愛犬 →8
アイコ，アイコ　相子（**オアイコ** 御～）→5, 92
アイコ　愛顧 →7　愛子〖女名〗→25
アイゴ　愛護 →7
アイコー　愛好 →8
アイコーシャ　愛好者 →14a
アイコーシン　愛校心 →14a
アイコク　愛国 →8
アイコクシャ，アイコクシャ　愛国者 →14c
アイコクシン，アイコクシン　愛国心

アカノゴハン　赤の御飯 →19
アカノ(・)タニン　赤の他人 →97, 98
アカノマンマ　赤の飯〚植〛→19
アカハジ，アカッパジ　赤(っ)恥(～をかく) →5d
アカハタ　赤旗 →5
アカハダ　赤肌 →5
アカハダカ　赤裸 →12
アカハナ，アカバナ，アカッパナ　赤(っ)鼻 →5d
アカバネ　赤羽〚地〛→21
アカハラ　赤腹〚鳥・魚〛→5
アカビカリ　垢光り →13
アカヒゲ　赤髭 →5
アカブサ　赤房 →5
アカフダ　赤札 →5
アカペラ　a cappella〔伊〕→9
アカボー　赤帽 →8
アカホン　赤本 →8
アカマイシ　赤間石 →12
アカマツ，アカマツ，(姓は アカマツ)　赤松 →5, 22
アカミ　赤身 →5　赤味 →93
アカミソ　赤味噌 →15
アカムケ　赤剝け →5
アカメ　赤目 →5
アカメル，アカメル　赤める →44
アガメル　崇める →43
アカモン　赤門 →8
アカラガオ，アカラガオ　赤ら顔 →12
アカラサマ，アカラサマ →12
アカラム，アカラム　赤らむ →44
アカラメル，アカラメル　赤らめる →44
アカリ　明り，灯 →2
アガリ　上がり，揚がり →2
……アガリ　…上がり(ヤクニンアガリ 役人～，ショーバイアガリ 商売～) →95

アガリオリ　上がり下り →18
アガリガマチ　上がり框 →12
アガリグチ，アガリグチ(グはクとも)　上がり口 →12
アガリコム　上がり込む →45
アガリサガリ，アガリサガリ，アガリサガリ　上がり下がり →18
アカリサキ　明り先 →12
アカリショージ　明り障子 →15
アガリダカ，アガリダカ　上がり高 →12
アガリダン　上がり段 →14
アカリトリ　明り取り →13
アガリバ　上がり場 →12
アガリハナ　上がり端(=上がり口) →12
アガリバナ　上がり花(=お茶) →12
アカリマド　明り窓 →12
アガリメ　上がり目(株が～だ) →95
アガリメ，アガリメ　上がり目〚目〛→12
アガリモノ　上がり物 →12
アガリユ，アガリユ　上がり湯 →12
アガル　上がる，揚がる　アガラナイ，アガロー，アガリマス，アガッテ，アガレバ，アガレ →44
アカルイ　明るい　アカルカッタ，アカルク，アカルクテ，アカルケレバ，アカルシ →53c
アカルミ　明るみ →93
アカレンガ　赤練(煉)瓦 →15
アカワイン　赤 wine →16
アカン　阿寒〚地・湖〛→21
アカンコ　阿寒湖 →14a
アカンタイ，アカンタイ　亜寒帯 →15
アカンベ，アカンベ，アカンベー，アカンベー，アッカンベー →d
アカンボー，アカンボ　赤ん坊 →94d
アキ　明き，空き →2
アキ　秋 →1　安芸(～の国) →21

本文イラスト
脇田悦朗
地図製作
ジェイ・マップ
装丁
三省堂デザイン室
組版
株式会社アイワード

©Sanseido Co., Ltd. 2025 Printed in Japan

第２版新装版の刊行にあたって

第 2 版の新装版を刊行するにあたり，次のことを行いました。

◯用紙・装丁をあらため，辞書の軽量化を図りました。

◯読者の方々からご指摘・ご質問をいただいた箇所について見直しを図り，一部に修正を加えました。

◯別冊の「アクセント習得法則 代表例」の音声を，三省堂のウェブサイトから，スマートフォンやパソコンで聞いていただけるようにしました。

内容の修正については，日本女子大学教授 坂本清恵先生にご協力いただきました。この場をお借りして感謝申しあげます。

この辞書が，これまで以上に読者の皆さまにご活用いただけましたら幸いです。

2024年12月20日

三省堂編修所

序

二十一世紀の始まる年に『新明解日本語アクセント辞典』を世に出した。それは，いわば二十世紀末までのアクセントを記録したものだった。その後，十余年の間に，インターネットの普及をはじめ日本語を取り巻く環境は大きく変わった。その中で日々新たな言葉が生まれ，アクセントにも新しい傾向がみられるようになった。

今回の第 2 版に向けての改訂作業も，この間の日本語の変化に単純に従うのではなく，これまで序文や解説で記してきた記述の方針によって進めた。新収録の言葉を選ぶに際しては，これまで収録することができなかったものや，新たに幅広い世代で日常的に使われるようになった言葉を中心に選ぶようにした。また，東京近郊の地名などの固有名詞や，読者の方々からお問い合わせの多かった言葉も加えた。そして，新しい傾向として一定の定着をみたと考えられるアクセントについては,それを追記した。あわせて《新は》《古は》《強は》といったアクセントの移り変わりについての注記も，時代を考慮し一部を改めた。その結果，収録語数は約1,600語増え，約76,600語となった。

さらに，この間のアクセント研究の進展や，読者の方々からのご質問を踏まえ,「解説」と「アクセント習得法則」も見直した。基本的な考え方は変えていないが，理解の助けとなるよう説明の仕方を一部改め，資料も増やした。

こうして，日本語の変化を取り込みつつ新たな版となったこの辞典だが，この間の最大の変化は，五十年にわたって辞典作りを導き，この序文を書き続けてくださっていた金田一春彦先生を2004（平成16）年に失ったことである。今回も，収録語の収集・アクセント調査は秋永が中心に行ったが，金田一先生が支えてくださった考え方は変えずに作業を進めたことから，引き続き監修者としてお名前を挙げさせていただくこととした。

この辞典が，これまで以上に読者の方々に広くご活用いただき，その中でお気づきになったことをお寄せいただけるならば，この上ない喜びである。

2014（平成26）年 1 月15日

秋 永 一 枝

『新明解日本語アクセント辞典』初版の序

私は，昭和三十三年に『明解日本語アクセント辞典』の序文を書いたが，今その本の三訂版にあたる序を書きながら，アクセントに対する考え方が，昔と今とで随分違っているのに気づいて驚く。

初版の序文を書いた頃は，見返しの地図に記したアクセントの区別のない地域の小学校の子供に，「箸」と「橋」，「雨」と「飴」の区別を尋ねても，全く答えてはくれなかった。その後注意してみると，アクセントの区別のない地域にも東京アクセントをかなり自由に使いこなせる人がおり，現在ではそういう若い人たちが次第に多くなりつつあることを知った。これは，テレビ・ラジオの普及によるところが大きいに違いない。とすると，そのような地域の人にとっても標準アクセントの辞典は必要であることがわかった。それならば，標準アクセントの法則などは大いに有効であろうと思い，今度の版では編者の秋永君に標準アクセントの法則の欄を，より詳しいものにしてもらった。勿論，アクセントの区別のある方たちが，標準アクセントをマスターする際にも，大いに役立つものと思う。

今回，再訂版よりも更に収録語数を増やし，本文のみで約 7 万5000語とした。この中には新語や固有名詞もかなり含まれている。また，若い人たちの使うアクセントも大幅に取り入れてあり，私どもの年代では全く使わないような外来語の平板型も，《新は》として記載してある。同時に，高年層の使用する古めかしいアクセントも，《古は》《もとは》として記してあり，その点一般の読者ばかりでなく研究者にも利用されるに違いない。

この辞典の語彙の収集・アクセントの調査は，初版，第二版と同じく，秋永一枝君が全面的にその任にあたった。永年，早稲田大学文学部の教授を勤めた秋永個人の著書とお考えいただきたい。

今回は，『新明解日本語アクセント辞典』と書名を改めたが，私どもの基本とする考え方は，初版，第二版の序に記したとおりである。新しい世紀に向けてこのようなアクセント辞典を世に送ることができるのは真に喜ばしい。読者の方がたが，それぞれの年代に応じて本書を利用してくださることを望んでやまない。

終りにあたり，本書の成るについて協力を惜しまれなかった多くの方がたに感謝の意を表する。

平成十三年一月十五日

金 田 一 春 彦

『明解日本語アクセント辞典』第二版の序

この辞典も，初版を世に送ってから二十二年余りになる。暖かく迎えて下さった御愛用の各位には慎んで御礼申し上げる。二十二年も経るうちには，日常使っている日本語の語彙も出入りし，中にはアクセントそのものが変化したものもある。ここに採録語数をふやし，第二版をお届けする次第である。

日本語のアクセント辞典としては，これとは別にNHKの『日本語発音アクセント辞典』というものがある。一つあればいいではないか，それに辞典によって単語のアクセントがちがうものがある，それはどうしたのだ，という声が聞える。が，そういうものではない。アクセント採録の目的にちょっとしたちがいがあるのだ。

NHKの辞典は，一口に言うと全国共通語の発音とアクセントの辞典だ。ということは，必ずしも東京という土地の発音とアクセントを収めたということではない。語形や発音の方で，オッコチルとかシャジ（匙）というのは，東京人の使う言葉であり，東京なまりであるが，そのようなものはNHKのアクセント辞典には採用していない。それに応じて，アクセントの面で東京なまりと判断されるようなものは，省いてある。

一方，この私どもの『明解日本語アクセント辞典』は，純粋の東京の発音，東京のアクセントと見られるものに焦点をあて，俗語や東京なまりの類までとりあげた。そのために資料としたのは，すべて純東京人と見られる人であり，中には，現在では老人層でないとほとんど使われていない形もあげてある。これも特別の用途があるだろうとの考えによるもので，意図するところを諒承されたい。

なお，この辞典の初版は，秋永一枝君が原稿を書き，私が通覧して意見を述べたものだった。が，今回は秋永君の書いたものをほとんどそのまま活字にした。秋永個人の著書と考えて頂いてよい。一言お断りしておく。

終りに際し，この本の成るについて，協力を惜しまれなかった各位に感謝の意を表する。

昭和五十六年四月三日

金 田 一 春 彦

『明解日本語アクセント辞典』初版の序

全国の日本語の中で，特に東京の言葉だけが正しい言葉で，ほかの地方の言葉はまちがった言葉だという行き方に私は反対である。東京語は決してそのような意図をもって作られた言葉でもないし，それよりも東京生れの人だけが得意げにふるまい，ほかの地方の人の言葉を見くだす態度はおよそ不愉快である。

しかし一方，日本語の乱れが人人の口にのぼって以来久しい。ラジオやテレビから流れる日本語は，ヨーロッパあたりへ持って行ったら，数か国語が代る代る聞えるようなものである。日本語を学ぶ外国人は，日本語を教えてくれる日本人ごとに，語彙表現が異なり発音が異なることをしきりに訴える。特にアクセントに至っては，関東の人と関西の人では高低を全く逆に発音し，また地方によってはアクセントが全然ないところさえある。代表的な日本語，規格にあった日本語を望む声は内外を通じて高まりつつある。

現代の日本人は，この要望にこたえる日本語を作り上げる責務をもつ。理想的な標準日本語は必ず生れなければならぬ。それは恐らく全国各地の方言から粋を集めた，豊かな，しかも洗練された言語体系であろう。そのような言語の基盤になるものは，やはり現実に日本全国に共通語として通用している，現在の東京語をおいてほかにない。この際，すべての日本人が，日常の生活言語のほかに東京語をも一応自分のものにすることが望まれる。

東京語のアクセントを記載した辞典はすでに世上に何冊か出ている。特にNHK編の“日本語アクセント辞典”は，良心的な編修態度を反映して，標準的なものとして名を得ている。しかし，この種の辞典にあげられた語彙の数は残念ながら少なく，例えば固有名詞の条を欠き，また助詞・助動詞の類や動詞の変化の類にはほとんど触れていない。これらは要するに，東京アクセントに相当通じた人にしてはじめて使いこなせる辞典だった。

本書編纂の意図は，これらの点を考慮し，どんな人でも使用できることをモットーとした。特に東京アクセントになじみの薄い人から一番要望されているのは，一体どういう言葉はどういうアクセントをもつかという，一般法則の呈示である。この辞典で一番力を注いだのはこの

点だと言っていい。

なお，個個の語については，アクセントのみならず，ガ行鼻音や，母音の無声化の有無など発音上注意すべき点を注記して，アクセント辞典であると同時に，日本語発音辞典としても役立つよう意を用いた。

ところで，この辞典は私が手をくだして作ったものではない。編修者は，現在早大国文学科の副手である秋永一枝君である。

四・五年前のこと，三省堂編修所では，同社から発行する一般諸辞典のための資料として，東京アクセントを記載した厖大なカードを作っていた。この仕事に直接あたったのは，当時同編修所員であった秋永君であり，この辞典の編修は，そのカードを基礎にしてはじめられたものである。同君はその後世に出ているすべての東京アクセントの文献を渉猟する一方，個個の専門語については，一一その道の専門家で，しかも東京生れ，東京育ちという条件を具えた人の門をたたいて，そのアクセントを確かめるという慎重ぶりだった。

なおそのほかに，寸暇をさいては東京各地および近郊を駆け回ってアクセントを調査して歩き万全を期したというのだから，その骨折りは驚嘆にあたいする。私はただ全体のでき上りを通覧し，巻末の法則のまとめ方について多少の知恵を貸したに過ぎない。これは，私の責任のがれを意味するのではない。ほとんど口出しをする余地がなかったのである。

この辞典が成るに至るまでには多くの方方の御好意と御協力をいただいたが，中でも有益な教示と便宜を与えられたNHK放送文化研究所・国立国語研究所の方方，土岐善麿博士，楳垣実氏，鈴木幸夫氏，貴重な時間を割いて一一の語を発音して下さった次の諸氏に厚くお礼申し上げる。

芥川也寸志，安倍季厳，安藤更生，飯島小平，飯島正，池田理英，石川光春，伊藤康安，岩本堅一，緒方規雄，小沼丹，加藤光次郎，加藤誠平，神尾明正，川合幸晴，岸野知雄，倉橋健，後藤真，斉藤直芳，佐口卓，鈴木孝夫，関根吉郎，高木純一，高島春雄，高山英華，滝口宏，辻光之助，坪井誠太郎，戸塚文子，中能島欣一，中村芝鶴，中村吉三郎，中村守純，仁戸田六三郎，野口弥吉，野村保，野村万蔵，林健太郎，檜山義夫，古川晴男，古川晴風，宝生弥一，宮川曼魚，武者金吉，山辺知行，山村宗謙，亘理俊次，渡辺辰之助（敬称略）

今この辞典を世に送り出すに際し，読者各位が当事者の意のあるところを汲んで，この辞典を活用してくださることを望んでやまない。そして，更にこの辞典の不備の点についても卒直な御意見をお寄せ下さり，将来の改訂のために資することができるならば，これに越した喜びはない。

昭和三十三年五月五日

金 田 一 春 彦

この辞典を使う人のために

1 総記

この辞典は，日常多く用いられる語を中心として，固有名詞を含む約76,600語を選び，その**“標準的な東京アクセント”**と合わせて**“発音”**を示したものである。

アクセントは単語ばかりでなく，助詞・助動詞・接辞・造語成分など，複合する語によってアクセントの定まるものにも記載して，実際の会話の便を計った。

なお，巻末に**“アクセント習得に必要な法則”**をあげて，標準アクセントをマスターする一助とした。この習得法則の目次を本文だけでなく，巻末見返しにも収めて利用しやすくした。

以下ここで**東京**というのは東京都及びいわゆる東京式アクセントの地域をさすのではなく，東京旧市内でその語に馴染みのある人のアクセントを**東京アクセント**として取り上げてある。

下にこの辞典の項目の例を掲げる。それぞれ当該箇所を参照していただきたい。

←見出し語→	←解説	［習得法則番号］→
ニホンゴ，ニッポンゴ	日本語	→14
ジテン，《古は **ジテン**》	字典，辞典，事典	→8
アク**セント**	accent	→9

2 見出し語について

a．表記法

（1）発音の表記法

①見出しの部分に，**カタカナアンチック**体を用いて発音を表わし，高く発音する部分に ￣ を用いてアクセントを表わした。

②表音式をとった。現代仮名遣いとは必ずしも一致しない。

（イ）引き音は **ー** で示した。**イ**，**ウ** のうち引き音にも発音するものは小さい★の印をつけて，**イ★**，**ウ★** のように表わした。 —解説*24*ページ参照—

（ロ）促音は，小文字の **ッ** で示した。

（ハ）**ジ・ヂ**，**ズ・ヅ** は，**シジミ**（蜆），**チジミ**（縮），**スズミ**（涼），**ツズミ**（鼓）のようにすべて **ジ**，**ズ** で表わした。

③**ガ**行鼻音は，**カ゚・キ゚・ク゚・ケ゚・コ゚** のように半濁音符をつけて示した。

—解説*23*ページ参照—

④母音の無声化は，フ**ク**（吹く）のフ，**ア**キ**カゼ**（秋風）のキのように細字によって

示した。 —解説25ページ参照—

⑤**ウマ**（馬），**ウマレル**（生れる），**シラウメ**（白梅），**ウモレギ**（埋れ木）のような，自然の発音で〔m〕の音になるものは，　**ウマ，ンマ**　**ウマレル，ンマレル**　**シラウメ，シランメ**　**ウモレギ，ンモレギ**　のように併記した。但し，**ウモー**（羽毛）のように，**ウ** の次に意義の切れめがあって〔m〕の音にならないものは **ウ** のまま記した。

⑥はねる音（撥音(はつおん)）は **ン** で表記したが，**ン** は後続する音の有無やその違いによって異なる。後続する音がなければ〔N〕だが，後続する音が唇音であれば〔m〕，歯音であれば〔n〕，軟口蓋音であれば〔ŋ〕，摩擦音や母音であれば鼻母音になるなど具体的な音声はさまざまである。

⑦外来語の発音は原則として一般の慣用に従って表記した。例えば外来語にみられる〔kwa〕は **クヮ**，〔di〕は **ディ** などのように，**クヮ，シェ，ジェ，チェ，ツェ，ツォ，ティ，ディ，デュ，ファ，フィ，フェ，フォ** の表記も用いた。

—解説27ページ参照—

⑧助詞・助動詞・接辞・造語成分などは，複合する単語の部分を **……** で代表させ，**……ガ，……ワ，……テ，……ラレル，……ケン**(…県)のように表わし，各法則番号のアクセント習得法則を参照させた。但し，複合する語によってアクセントや発音が変るために見出し語ではアクセントを示しにくいものはひらがな見出しとし，各法則番号のアクセント習得法則を参照させた。

……ワ；**……ワ**；**……ワ**　…は〖助〗(**トリワ**　鳥～，**ハナワ**　花～，**アメワ**　雨～）→71
……けん　…軒〖数〗→34，35
ご……　御…〖接頭〗→92

（2）アクセントの表記法

—解説16ページ参照—

①高く発音する部分は ‾ で示した。但し，次が低く発音される場合には ˥ を付した。**イヌ** のように，語の末尾につく ˥ は，その語の後に「が」「は」などの助詞がつく場合に助詞が低く発音されることを示している。

キジ	雉	**イヌ**	犬	**サル**	猿	**モモタロー**	桃太郎
キジガ	雉が	**イヌガ**	犬が	**サルガ**	猿が	**モモタローガ**	桃太郎が
キジワ	雉は	**イヌワ**	犬は	**サルワ**	猿は	**モモタローワ**	桃太郎は

二拍めから上がる語で，第二拍が引き音や撥音，二重母音副音の場合，無造作な発音の折や個人によって第一拍から高くなる。例えば，**トーキョー** を **トーキョー**，**シンブンシャ** を **シンブンシャ**，**カイシャ** を **カイシャ** のように。また，具体的発音では，促音はその前の拍と同じ高さを保とうとする。例えば **ゲッキュー** を **ゲッキュー**，**ハッキリ** を **ハッキリ**，**イッサイ** は **イッサイ** のように，本書ではアクセン

ト体系から考えて，以上の表示はすべて割愛してある。

②連語などアクセントに切れめがある場合には，そこに ・ を置き，区切りを示した。

アキノ・ナナクサ　秋の七草　　**ネコモ・シャクシモ**　猫も杓子も

③アクセントの切れめの有無によって，複合語の後部のアクセントが変化する場合があるが，スペースの節約上次のように表わした。

（イ）次のような場合，複合して切れめがなくなると，間の低い拍が高く平らに変化する。即ち … の部分は切れめがある時は低く，切れめがなくなると高く発音される。

センザイ(・)イチグー　千載一遇　｛**センザイ・イチグー** / **センザイイチグー**

ミナモトノ(・)ヨシツネ　源義経　｛**ミナモトノ・ヨシツネ** / **ミナモトノヨシツネ**

（ロ）次のような場合，複合して切れめがなくなると，後部の高い拍が，低く平らに変化する。即ち - - - の部分は切れめがある時は高く，切れめがなくなると低く発音される。

ジガ(・)ジサン　自画自賛　｛**ジガ・ジサン** / **ジガジサン**

ニジュー(・)イチ　二十一　｛**ニジュー・イチ** / **ニジューイチ**

（ハ）次のような場合は，切れめがある時も複合して切れめがなくなる時も，常にアクセントが変化しない。

ゼンナン(・)ゼンニョ　善男善女　｛**ゼンナン・ゼンニョ** / **ゼンナンゼンニョ**

ヤマダ(・)ハナコ　山田花子　｛**ヤマダ・ハナコ** / **ヤマダハナコ**

b. 配列

(1)見出しがなの配列

発音式五十音順によるが，同じ**カナ**のことばがつづく時は，次の方針によった。

①拍数の少ないもの（**ャ**，**ュ**，**ョ** などのつく拗音(ようおん)及び外来語における **ァ**，**ィ**，**ェ**，**ォ** などの小文字を含むもの）や，引き音（**ー**）及び促音（**ッ**）を含むものは，直音の前に置いた。なお，**シャ**，**シュ**，**ショ** や **ファ**，**フィ**，**フェ**，**フォ** の類，及び引き音や促音はそれぞれ一拍と数える。

イシャ　医者　　**イシヤ**　石屋

②いわゆる清濁は，清音，濁音，半濁音の順に配列した。

ハハ　母　**ハバ**　幅　**ババ**　婆，祖母　**パパ**　papa

③助詞・助動詞・接辞・造語成分など，…… のつくものは，…… のつかないものの後に置いた。

テ　手　**……テ**〘助〙
オ　尾，緒　**……オ**　…を〘助〙　**お……**　御…〘接頭〙

④人名及び活用形に限り，姓及び終止形の見出し内に収めた。

アシカガ　足利〘地・姓〙
　〜・タカウジ，アシカガタカウジ　〜尊氏
サク　咲く　**サカナイ，サコー，サキマス，サイテ，サケバ，サケ**
アオイ　青い　**アオカッタ，アオク，アオクテ，**《新は **アオクテ**》，
　アオケレバ，アオシ

⑤東京都区内で現実に行われていても，標準アクセントとしては望ましくないものや，現実には行われていないが標準アクセントとしては望ましいものに限り，《　》内にそれぞれ次のような注を付した。

アネ，《**アネ** は避けたい》　姉　**クワ，**《**クワ** は避けたい》　鍬
クモ，《**クモ** も許容》　雲　**オル，**《**オル** も許容》　織る

（２）発音及びアクセントの配列

①発音及びアクセントの同じ語は，原則として同じ見出しのもとに入れた。但し，……を伴う助詞・助動詞・接辞・造語成分の類は別項をたてた。
②発音が同じで，アクセントの異なるものは，原則として平板式，起伏式の順に配列した。

カキ　柿　**カキ**　牡蠣　**カキ**　垣

③同じ語彙で類似の発音をもつものは，慣用及び標準音として望ましいものに重点を置いて配列した。
（イ）それぞれの項をたてて，併記した。

ハイ，ハエ　蠅　**ハエ，ハイ**　蠅

（ロ）それぞれの項をたて，望ましくない方の見出しにのみ望ましい形を併記した。

サケ　鮭　**シャケ，サケ**　鮭
アナタ　貴方　**アンタ，アナタ**　貴方

（ハ）慣用または，望ましい方の見出しに併記した。

ジッポン，**ジュッポン**　十本　　**セピア**，**セピヤ**　sepia

（ニ）誤用または望ましくない発音の場合は，⇒ で正しい発音を参照させた。

シャジ，《新は **シャジ**》　匙 ⇒**サジ**

（ホ）清濁のみ異なるような語の類は，慣用または望ましい方を先にして同一項目に併記した。その場合，望ましくない方を（　）に入れる場合もある。

ハンドバッグ，（**ハンドバック**）　handbag

④二通り以上のアクセントや発音があるものは，標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記した。また年代的に新しいアクセントや，伝統的で古めかしいアクセントの層の目立つものに限り，《新は…》，《古は…》，《もと…》のように示した。但し，これはあくまでも相対的な異なりで，一定の年代を示すものではない。また，高年層にはふつうに用いられるが，中年層以下には強めの際にのみ用いられるようなものは，《強は…》のように示した。

ス，《新は **ス**》　巣
ス**シ**，《新は **スシ**》　鮨
ノゾム，《新は **ノゾム**》　望む，臨む
カキ**コム**，《新は **カ**キ**コム**》　書き込む
タカイ　高い　……，**タカ**ク**テ**，《新は **タカ**ク**テ**》，……
オトメ，《古は **オトメ**》　乙女
アカトンボ，《古は **アカトンボ**》　赤蜻蛉
カミ，《もと **カミ**》　神
オモイキル，**オモイキル**，《古・強は **オモイキル**》　思い切る
ナマヤサシイ★，**ナマヤサシイ**★，《古・強は **ナマヤサシイ**★》　生易しい

⑤使用度の高い動詞・形容詞の単純語にはその活用形（形容詞には文語終止形も）を示した。他の語は習得法則の活用表を参照し，本文中の終止形からそれぞれ類推していただきたい。

3　解説の部分について

a．表記法

原則として，漢字・平仮名交じりとし，（　）内に用例・補助解説を，〖　〗《　》内に略語・補注などを示した。

(１)漢　字

①常用漢字を重視したが，必要により常用漢字以外の漢字も用いた。

②常用漢字による書きかえのうち，意味のとりにくいものなどは，もとの字を（　）に入れて示した。但し，複合語以外は併記した。

日食(蝕)　　包(庖)丁　　炎,焔　　切る,斬る,伐る

③あて字は慣用のものに限り使用した。

ステキ　素敵　　　タバコ　煙草

(２)**現代仮名遣い**を用いた。送り仮名は，誤読のおそれのない範囲にとどめた。

(３)外来語

①直接日本語に影響した言語のスペルを入れ，〔　〕内に国籍を表示するのを原則とした。但し，英語は原則として表示しない。

パン　pão〔葡〕　　　**ガラス**　glas〔蘭〕
ジャム　jam　　　**クリーム**　cream

②日本語と外来語との複合語は，原則として日本語と原語のスペルをつづけて記し，英語以外は最後に国籍を示した。

マドガラス　窓 glas〔蘭〕　　　**ナマクリーム**　生 cream
クリームイロ　cream 色　　　**パンヤ**　pão 屋〔葡〕

③国籍の異なる外来語と外来語との複合した和製語はプラスの印で結び，各のスペルのあとに国籍を示した。但し，同一の国籍のものは〔和〕とし，＋ を省略した。

ジャムパン　jam〔英〕＋pão〔葡〕
コーヒーポット　koffie〔蘭〕＋pot〔英〕
ゲームセット　game set〔和〕

b．配列

同じ見出しが二語以上の語を示す場合は，コンマ「，」或は中黒「・」を用い，以下を考慮して併記することを原則とした。

(１)和語，漢語，外来語の順

タイ　鯛…　体,対,帯,隊,態…　他意…　泰〘国〙…　tie

(２)感動詞・副詞の類，動詞，形容詞，一般名詞，数詞，固有名詞，省略語の順

(３)複合度の強いものから，弱いものへの順

C．アクセント習得法則

それぞれの解説の末尾には，→ のあとに巻末のアクセント習得法則の法則番号が

示してある。これは東京アクセントの法則を **0** から **99** のグループ別に収めたものである。音韻によってアクセントや発音が更に変化するものには，そのあとに **a b c d** を付した。単純語はむずかしいが，転成語や複合語のアクセントを覚えるには，それらの法則を習得することが近道である。但し，語源や語構成に諸説あるものなどは法則番号を省略してある。

4　記号一覧

，　見出し語では，二通り以上のアクセント及び発音がある場合に用いた。

カミナリ，**カミナリ**　雷
カナシミ，**カナシミ**，**カナシミ**　悲しみ

解説にあたる部分では，二つ以上の同音語がある場合に用いた。

ジシン　自信，地震，磁針

・　見出し語では，アクセントの切れめを示した。

サンジュー・サンカショ　三十三箇所

解説にあたる部分では「及び」，「や」，「と」の意味を表わすのに用いた。

アオキ　青木〖植・姓〗
ジョーシンエツ　上信越＜上野(こうずけ)・信濃(しなの)・越後(えちご)

；　助詞・助動詞・接辞・造語成分など，……を伴って表わされる見出し語のうち，前部の語のアクセントや音韻の性格により，複合語のアクセントが変化する場合に用いた。

……ガ；**……ガ**；**……ガ**　…が〖助〗(**トリガ**　鳥～，**ハナガ**　花～　**アメガ**　雨～)

：　助詞・助動詞・接辞・造語成分など，……を伴って表わされる見出し語のうち，前部の語の拍数により，複合語のアクセントが変化する場合に用いた。

……マル：**……マル**　…丸(キ**クマル**　菊～，**ランマル**　蘭～，**ヒヨシマル**　日吉～，ヒ**カワマル**　氷川～)

。　解説中，連続する語が同格でなく，そこで文が切れるような場合に用いた。

シゴ　四五(=四か五。年は～)
コーコ，**コーコー**　香香(=漬物。**オコーコ**　御～)

★　**イ**，**ウ** のうち普通の発音では引き音に発音されるものは，**イ★**，**ウ★** のように示した。

テイ★ネイ★　丁寧　　**ウレシイ★**　嬉しい　　**クウ★**　食う

＝　説明及び言いかえを示す場合に用いた。

オカガミ　御鏡(=鏡餅)　　**オッパイ**　(=乳)

〜　アクセントの区切りのある語で，二通り以上のアクセントがある場合，アクセントの変らない部分の省略に用いた。

アトノ(・)マツリ，**〜(・)マツリ**　後の祭

人名が姓の見出しに追いこまれていて，姓にあたる部分のアクセントが変らない場合，見出し語の部分の省略に用いた。

ダテ　伊達〖姓〗
〜(・)マサムネ　〜政宗

〜　用例中で，見出し語及び見出し語にあてた漢字仮名交じりの部分の省略に用いた。

ハナ　端(=最初。〜から)　　**ハナ**　花(**オハナ**　御〜)

＜　省略される以前の形や，外来語で著しく発音の変化した場合などに用いた。

コーコー　高校＜高等学校　　**デパート**　＜department store

＋　外来語が複合した和製語であることを示す。

ジャムパン　jam〔英〕＋pão〔葡〕
クレパス，**クレパス**　＜crayon＋pastel

↔　反対語・対照的な語を表す。

オーテ　大手(↔からめて)　　**オツ**　乙(↔甲)

⇒　他項を参照させる意を表す。

ウタマロ　歌麿〖人〗⇒**キタガワ〜**　(姓名全形を参照させたい)
ウデル　茹でる ⇒**ユデル**　(望ましい発音を参照させたい)

→　巻末のアクセント習得法則番号の参照に用いた。

トーキョート　東京都 →14a　　**チヨダク**　千代田区 →14

《　》　アクセントに関しての注を示す。

アカトンボ,《古は **アカトンボ**》 赤蜻蛉
モミ,《**モミ** は避けたい》 籾
アシタ,《副詞的には **アシタ**》 明日
ヤマダ 山田《姓も》

（　）　見出し語では，発音上の言いかえに用いた。

フジユー,（**フジュー**） 不自由　　シュッ**タイ**,（シュ**ツライ**） 出来
アオバエ，**アオバエ**（**エ**は**イ**とも） 青蠅
アイディア，**アイディア**（**ディ**は**デ**とも） idea

特に外来語などでは，望ましくはないが慣用となっている形に用いた。

ベッド,（**ベット**） bed　　**ファン**,（**フアン**） fan

解説にあたる部分では，用例及び補助解説などに用いた。
〘　〙　品詞，固有名詞，百科項目などの指示及び補助解説などに用いた。
〔　〕　外来語の国籍を示した。

〔主　要　略　語　表〕

品詞		位相語		外来語	
〘名〙	名詞	〘医〙	医学	〔伊〕	イタリア語
〘数〙	数詞	〘衣〙	衣服	〔蘭〕	オランダ語
〘副〙	副詞	〘映〙	映画	〔希〕	ギリシャ語
〘連体〙	連体詞	〘演〙	演劇	〔西〕	スペイン語
〘代〙	代名詞	〘化〙	化学	〔華〕	現代中国語
〘接〙	接続詞	〘軍〙	軍事	〔独〕	ドイツ語
〘感〙	感動詞	〘経〙	経済	〔仏〕	フランス語
〘助〙	助詞	〘建〙	建築	〔葡〕	ポルトガル語
〘助動〙	助動詞	〘国〙	国名・旧国名	〔梵〕	サンスクリット語
〘接頭〙	接頭辞	〘児〙	児童語・幼児語		
〘接尾〙	接尾辞	〘宗〙	宗教	〔拉〕	ラテン語
		〘書〙	書名	〔露〕	ロシア語
		〘食〙	食物	〔和〕	和製語
活用		〘植〙	植物名		
〘四活〙	四段活用	〘人〙	人名	（英語は特記しない）	
〘五活〙	五段活用	〘生〙	生物		
〘上一活〙	上一段活用	〘俗〙	俗語・方言		
〘下一活〙	下一段活用	〘動〙	動物名		

解説

1　アクセントについて

現在“アクセント”ということばは，さまざまに使われているが，“日本語のアクセント”という時の標準的な使い方としては，**“個個の語について定まっている高低の配置”**という意味である。

“語”というのは，ほとんど文法でいう単語と同じとみていただいてよい。例えば，「橋」の時は**シ**を高くいう，「箸」の時は**シ**を低くいう，というようなのが日本語のアクセントである。これは既に御承知のことと思う。但しここでちょっと注意してほしいことは，ある語を発音した時の声の上がり下がり，それがそのままアクセントだとはいえないことである。

例えば，同じ「箸」という単語でも，「箸？」というように相手に問いかけの気持でいう時は，**ハシ** といったあとで，**ハシィ**↗ のように語尾を上げて発音する。この場合の語尾の高まりは，アクセントではなくイントネーションとよばれるものである。なぜならば，これは特定の語について決まっているのではなく，“問いかけ”つまり返事がほしいという，一般的な心理によって決まるからである。こういう声の上げ下げは，大体，日本語を通じて全国共通の現象であるから，特に骨を折って覚える必要はない。ところがアクセントは，その“語”について決まっているもので，それも地方によって異なるから，特に東京共通語を使おうとする場合には“学習”が必要である。

人によると，アクセントは単語によって決まっているというが，「箸」と「箸箱」では，「箸」のアクセントが違って変だと思われるかもしれない。しかし，これはそれでよい。なぜなら，「箸箱」は一つの**“複合語”**であって，「箸」とは別の単語だからである。複合語は，アクセントの法則に従って変化をする。つまり，基本的な語と複合の型とを覚えれば，どうにか使いこなせるものである。そこで，この辞典では，巻末に**アクセント習得法則**をもうけ，本文の単語から参照できるようにした。

助詞や接尾辞などもやはり単語だが，それだけを切り離して発音することがない。そこで，この辞典では，名詞や動詞などについた時のアクセントの型を示してある。

もう一度くり返せば，日本語のアクセントは，**“語による高低の配置のきまり”**である。ここで高低の配置といっても，その高い部分と低い部分との開きが，音楽で 4 度だとか 5 度だとかいうような，そんなやかましいものではない。ただ上がっているか，下がっているか程度のごく大まかなものである。つまり，すべての語は，低い部分と高い部分に分けられる。従って，**“アクセントの型”**というのもごく少数しかなく，東京アクセントでは一拍語ないし六拍語は，*18*，*19*ページの第 **1** 表の型のどれかに含ま

れてしまう。この表は，型の一覧表であると同時に，この辞典における標準アクセントの発音法をも簡単に示している。例えば，第**1**表の「鳥が」は**ト**が低く，**リ**が高く，助詞「が」などがつけば，**トリガ**のようにそれも高く発音することを表わす。「花が」は**ハ**を低く，**ナ**を高く，助詞「が」などがつけば，**ハナガ**のように次の拍を低く下げて発音する。つまり，この辞典で線のある部分を高く，ない部分を低く発音すれば，とにかく東京式アクセントで話すことができる。￣┐の部分は￣と同じく高い部分だが，次が低いことを表わす。

ここに拍というのは，大体カナ一字で書かれる音をさす。例えば「鳥」は二拍，「桜」は三拍と数える。引き音(**ー**)，撥音(はつおん)(**ン**)，促音(**ッ**)も一拍に数える。拗音(ようおん)は例外で，**キャ**，**キュ**，**キョ**などはそれぞれ一文字分の長さで発音されるので，カナ二字で一拍と数える，従って，「天」は二拍，「両親」は四拍となる。

以上のように，日本語のアクセントは，高低の変化である。これに対して，日本語のアクセントを強弱変化だと主張する人があるが，これは違う。英語やドイツ語などでは，一つ一つの単語について，どの単語は，どこを強めて発音するか，ということが決まっている。「命令」という意味の名詞 ‘dictate’ は**ディ**のあたりを強く発音し,「書きとらせる」「命令する」という意味の動詞は，**テ**のあたりを強く発音する。これは，その時の話し手の気持にはかかわらない。これが英語のアクセントである。これに対して日本語では，日常の発音で，ある部分を強くいうことはあるが，それは感情をこめていうような場合である。つまり，その時の臨時的な傾向で，各の単語について強めのきまりがあるわけではない。英語では強めが単語に備わっているのに対し，日本語で単語に決まっているのは高低である。その関係は全く平行的である。だから，英語の単語における強めのきまりをアクセントと呼び，日本語では高低のきまりをアクセントと呼ぶ。英語のは **“強弱アクセント”** であり，日本語のは **“高低アクセント”** である。

この日本語のアクセントについてまず注意しなければならないことは，地方によって違いが激しいということである。標準アクセントの問題がやかましいのも原因はそこにある。

第**2**表(*20*ページ)の「**各地アクセント一覧表**」を御覧いただきたい。表中で「類別」というのは，平安末の京都アクセントと現代諸方言アクセントから，古くは同じアクセント型だったと思われる語彙をまとめたものだが，ここに示すように，日本語のアクセントは複雑極まりない。例えば第三類の「花」というアクセントは，東京・名古屋・広島などでは**ハ**を低く，京都・大阪・高知などでは**ハ**を高く発音する。反対に第五類の「秋」というアクセントは，東京・名古屋・広島などでは**ア**を高く，京都・大阪・高知などでは**ア**を低く発音する。このほか，見返しの地図に示すように，仙台・水戸・宮崎などでは，語によるアクセントの区別をもたない。全国どこへ行っても，

名　詞　の　型　一　覧　表

第**1**表

型の種類＼拍数		一拍の語	二拍の語	三拍の語	四拍の語	五拍の語	六拍の語
平板式	平板型	ヒ（ガ） 日（が）	ハナ（ガ） 鼻（が）	サクラ（ガ） 桜（が）	トモダチ（ガ） 友達（が）	トナリムラ（ガ） 隣村（が）	ムラサキイロ（ガ） 紫色（が）
起伏式	尾高型		ハナ（ガ） 花（が）	オトコ（ガ） 男（が）	イモート（ガ） 妹（が）	オショーガツ（ガ） お正月（が）	ジューイチガツ（ガ） 十一月（が）
	中高型			ココロ（ガ） 心（が）	ミズウミ（ガ） 湖（が）	ワタシブネ（ガ） 渡し船（が）	アイアイガサ（ガ） 相合傘（が）
					ウグイス（ガ） 鶯（が）	ナツヤスミ（ガ） 夏休み（が）	コドモゴコロ（ガ） 子供心（が）
						オナイドシ（ガ） 同い年（が）	シンカンセン（ガ） 新幹線（が）
							オマワリサン（ガ） お巡りさん（が）
	頭高型	ヒ（ガ） 火（が）	アメ（ガ） 雨（が）	イノチ（ガ） 命（が）	フジサン（ガ） 富士山（が）	アクセント（ガ） accent（が）	サイクリング（ガ） cycling（が）

注　●は名詞の一拍を，▽は助詞の一拍を表わす。

第２表　**各地アクセント一覧表**　（二拍名詞＋ガ・ワ）

<table>
<tr><th rowspan="2">類別／代表語／地方名</th><th colspan="2">第一類</th><th colspan="2">第二類</th><th colspan="2">第三類</th><th colspan="2">第四類</th><th colspan="2">第五類</th></tr>
<tr><th>庭・竹</th><th>水・鳥</th><th>歌・音</th><th>夏・石</th><th>犬・髪</th><th>花・色</th><th>笠・船</th><th>松・箸</th><th>春・秋</th><th>雨・窓</th></tr>
<tr><td>高知</td><td colspan="2" rowspan="4">●●
●●▼</td><td colspan="4" rowspan="4">●○
●○▽</td><td colspan="2">○●
○●▼</td><td colspan="2">○●
○●▽</td></tr>
<tr><td>徳島</td><td colspan="2" rowspan="3">○●
○○▼</td><td colspan="2">○●～○◐
○●▽</td></tr>
<tr><td>大阪</td><td colspan="2" rowspan="2">○◐
○◐▽～
○●▽</td></tr>
<tr><td>京都</td></tr>
<tr><td>秋田</td><td colspan="4">○○
○○▽</td><td colspan="3">○◐
○●▽</td><td colspan="2"></td><td>○◐
○●▽</td></tr>
<tr><td>函館</td><td colspan="4">○●
○○▼</td><td colspan="3"></td><td colspan="2"></td><td rowspan="2">○●
○●▽</td></tr>
<tr><td>富山</td><td colspan="2" rowspan="5">○●
○●▼</td><td>○●
○●▽</td><td colspan="2">●○
●○▽</td><td></td><td colspan="2">○●
○●▼</td><td></td></tr>
<tr><td>高田</td><td colspan="2">○●
○●▽・○●▼</td><td colspan="2"></td><td colspan="4" rowspan="6">●○
●○▽</td></tr>
<tr><td>松本</td><td colspan="4" rowspan="5">○●
○●▽</td></tr>
<tr><td>東京</td></tr>
<tr><td>名古屋</td></tr>
<tr><td>広島</td><td colspan="2">○●(○○)
○●▼(○○▽)</td></tr>
<tr><td>福岡</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>長崎</td><td colspan="4" rowspan="2">●○
○●▽</td><td colspan="6" rowspan="2">○●
○○▼</td></tr>
<tr><td>鹿児島</td></tr>
</table>

注　○，▽は低い拍を表す。｝▽，▼は助詞　ガ，ワを表わす。
●，▼は高い拍を表す。
◐は一拍が長くなり，降り拍(くだりはく)であることを示す。
類別の代表語「庭・竹，歌・音，花・色，笠・船，雨・窓」は広い母音(a，e，o)で終る語を，「水・鳥，夏・石，犬・髪，松・箸，春・秋」は狭い母音(i，u)で終る語を示す。
「～」は同じ類，同じ語でも話者によってゆれることを，「・」は同じ類でも語によって異なることを，（　）内は研究者によって認定の異なることを示す。
地方名はそれぞれ市(旧市)の中心部のアクセントを示す。なお「高田」は現上越市。

アクセントが変らないというような語は全くない状態である。但し，この中にも一定の類型があって，大きく次の四つのグループに分けることができる。この四つの区別については，あとになってまた述べる。読者の中で，自分のアクセントがどのグループに属するか迷われる方は，前見返しの「**アクセント分布図**」を参照していただきたい。

⑴	東京式アクセント	秋，雨，箸，笠……初めを高く発音する 髪，花，石，音……初めを低く発音する
⑵	京阪式アクセント	髪，花，石，音……初めを高く発音する 秋，雨，箸，笠……初めを低く発音する
⑶	N型(けい)アクセント	アクセントの型の種類が一定のもの
⑷	無型アクセント	語ごとのアクセントが定まらない

アクセント分布図のうち，⑶にあたるのは，九州・沖縄地方や隠岐の 5，6 及び 8' の地域などで，⑷にあたるのは 8 の地域である。

以上のような日本語のアクセントは，一体どういう役目を果すのだろうか。第一に，日本語には同音異義語が実に多い。漢語となるとなおさらである。その場合，語によってアクセントが異なれば，語の**“意義の違い”**を区分するのに便利である。

例えば，「火にあたるより日にあたれ」は東京式では **ヒニアタルヨリ・ヒニアタレ** という。この「火」と「日」が同じアクセントであったら，どちらにあたるのをすすめているのか分からなくなってしまう。「亀と瓶(かめ)」，「箸(はし)と橋」，「鶴(つる)と弦」「牡蠣(かき)と柿」なども，前後の関連がなくとも，アクセントで聞きわけることができる。

京阪式方言でも，具体的高低の姿こそ違え，一つ一つを高低変化で区別する点では同じである。例えば「火にあたるより……」は **ヒニアタルヨリ・ヒニアタレ** と区別して発音する。

アクセントは，以上のほかに，**“語と語の切れめを示す”**という働きをもつ。東京式アクセントでは，原則として“高く発音される部分は，一語のうち一箇所にかたまっている。つづけて二拍以上が高くなることはあるが，一語のうちで高く発音される拍が，離れた場所にあることはない”※1。このことは，“この語が一語であって二語ではない”ことを表わしている。

東京式アクセントにはまた，“語の第一拍と第二拍とは高さが異なる”という性質がある。すなわち，“第一拍が高ければ，第二拍が低く，第一拍が低ければ第二拍は高い”。このことは**“ここが語の始まりだ”**ということを示している。これらは，次のような文例にあうとき，一層判然とするであろう。※2

二羽鶏がいる	**ニワ・ニワトリガイル**
庭には鳥がいる	**ニワニワ・トリガイル**
庭には鶏がいる	**ニワニワ・ニワトリガイル**
庭には二羽鳥がいる	**ニワニワ・ニワ・トリガイル**
二羽庭には鳥がいる	**ニワ・ニワニワ・トリガイル**

※1　例外となる場合もある。アクセント習得法則35の注意⑦，法則36のⅡ(2)，法則37注意を参照。
※2　例外となる場合もある。アクセント習得法則 c 末尾の「注意」を参照。

{ 庭には二羽鶏がいる　　ニワニワ・ニワ・ニワトリガイル
{ 二羽庭には鶏がいる　　ニワ・ニワニワ・ニワトリガイル

ところで，現在日本語のアクセントの中で，東京のアクセントが **“標準アクセント”** とみなされてきている。

これについては，地方の人からいろいろ反対意見が出された。全国のアクセントはまちまちで統一できるものではないとか，伝統的なことばをもつ京阪式アクセントが望ましいとか……。しかし，東京式アクセントには，標準アクセントとして待遇していい長所がある。見返しの地図をみられたい，東京に似たアクセントの地方は，関東の中央部から中部地方の大部分，中国地方の全体と九州の入口あたりまで及び，およそ日本の半分以上の地方に東京風のアクセントが広まっている。もちろん，地方によって少しずつ違いがある。しかし，日本人の総人口の半数以上は，ちょっとした心づかいをすれば，東京アクセントを話せるようになる。それにくらべると，京阪式のアクセントは誇るべき伝統をもっているが，分布範囲が狭く，使用者の数も少ない。

その他，東京が日本最大の文化の中心であり，東京語というものがいわゆる標準語とされていることや，前述のようにアクセントの機能をよく発揮していること，及びアクセントの法則が比較的はっきりしていて，覚えやすいことなどからも，東京式アクセントは標準アクセントとしてふさわしい。

これは京阪式アクセントを使用される人には，不本意なことかもしれない。しかし，京阪式アクセントとは対照的にできているから，自分たちのもっているアクセントと東京式のアクセントとの間にみられる **“対応の法則”** を知ることによって，東京アクセントを比較的楽にマスターすることができよう。これについては，巻末の **“アクセント習得法則”** を利用していただきたい。

他方，仙台・水戸などのアクセントの型の区別のない地方の人たちは，基礎になるアクセント感をもたれないために，東京アクセントの習得は少なからず困難であるが，全体のことばの調子を改め，「橋と箸」「着ると切る」など，同音異義語に注意すれば，徐徐に効果をあげることができよう。

この辞典では，見出し語のすべてに現在東京で広く行われているアクセントを注記した。現在，東京で幾通りものアクセントが行われている場合は，なるべく現状に即して載せるようにしたが，スペースの関係上，省略した場合も多い。これらアクセントの選定に当っては，**その語に馴染みのある人のアクセントを重用**した。

また，比較的高年層でのみ多く使われている古く伝統的なアクセント，若い層でこのごろ盛んに使われだした新しいアクセントは，特に注記して参考に供した。これから東京アクセントを覚えようとする方方は，《古は…》，《もと…》，《新は…》，《強は…》という注記のないものに，まず注意していただきたい。

なお，地方の固有名詞などには，各地のアクセントもあわせて注記したかったが，

スペースの都合上割愛せざるを得なかった。また，「雲と蜘蛛」，「織ると折る」のような東京式アクセントでは区別できず，方言に区別がみられるようなものについては，見出し語のいちいちにその旨を注記した。

2 ガ行鼻音（ガ゚・ギ゚・グ゚・ゲ゚・ゴ゚）について

語中語尾の**ガ**行音は地方によりさまざまで，あるいは鼻にかからない **ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ**〔g〕で，あるいは，鼻にかかる **ガ゚・ギ゚・グ゚・ゲ゚・ゴ゚**〔ŋ〕で，あるいは，〔g〕の前に軽い鼻音が入る **ンガ・ンギ・ング・ンゲ・ンゴ**〔ᵑg〕で発音される。

東京・大阪などは混乱地帯で，中年層・若年層では **ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ** に発音する傾向が盛んになりつつあるが，いわゆる東京共通語では次のような法則のもとに，鼻音の **ガ゚・ギ゚・グ゚・ゲ゚・ゴ゚** を使うことになっている。

Ⅰ　語頭の**ガ**行音は鼻音化しない。但し，助詞「が」「ぐらい」，助動詞「ごとし」などは鼻音化する。

ガイコク（外国）　**ギンコー**（銀行）　**グアイ**（具合）
ゲタ（下駄）　**ゴム**（gom）　**ハルガ゚**（春が）

Ⅱ（1）語中・語尾の**ガ**行音は鼻音化するのを原則とする。

ハルガ゚スミ（春霞）　**ヤナギ゚**（柳）　**ウグ゚イス**（鶯）
ツゲ゚ル（告げる）　**ヒルゴ゚ロ**（昼頃）

（2）但し，次のような場合は鼻音化しない。

①擬声・擬態語その他同音のくり返し

ガンガン　**ギラギラ**　**グズグズ**　**ゲラゲラ**　**ゴロゴロ**
ゴーゴー，**ゴーゴー**（轟轟，囂囂）

②数詞の五

ジューゴ（十五）　**ゴヒャクゴジュー**（五百五十）

但し，数詞としての意義が薄れた熟語は鼻音化する。

シ**チゴ゚チョー**（七五調）　**シゴ゚ニジュー**（四五二十）
ジューゴ゚ヤ（十五夜）　キ**クゴ゚ロー**（菊五郎）

③軽い接頭辞の次にくる場合

オギョーギ゚（御行儀）　**オゲンキ**（御元気）

但し，敬語以外のものは両様の発音がみられることが多い。

付

東京アクセントの法則について

東京で日常用いられる語は，何万とある。その語をひとりひとりの東京人は，同じようなアクセントで発音している。これは決していちいち周囲の人のアクセントを耳に聞き，それを覚えてゆくのではない。それが証拠には，新しい単語ができても，東京人である限り，大体同じアクセントで発音される。これはなぜかというと，前もって頭の中にアクセントの法則のようなものを心得ていて，その法則にあわせて発音しているからである。その法則が各個人を通じて同じであるから，大体同じアクセントになる。

実は，この本文に掲げたすべての単語のアクセントも同様で，基本的な幾つかの語のアクセントをよく覚え，あとはその語のアクセントとアクセント法則によって，他の語のアクセントも類推しているのである。ここにおいて，東京アクセントをマスターするための近道は，**“基本的な単語のアクセントを覚えること”“東京アクセントの法則を覚えること”**ということになる。

アクセントの法則は，例えば，名詞であるとか，動詞であるとかいう品詞によって異なり，また，その語が複合語であるとか，転成語であるとか，畳語・省略語であるとかいう語のでき方によって異なる。なおまた，その語が和語とか，漢語とか，外来語とかの語の出自によっても異なるし，その語の拍数が何拍であるとかによっても違う。

東京アクセントは，他の方言アクセントにくらべて法則が比較的はっきりしているので，それらの法則を徐徐に習得してゆけば，個個の単語のアクセントを丸暗記するよりもずっと楽に，東京アクセントをものにすることができる。ここでは，それら東京アクセントの法則をグループ別に **0** から**99**までの項に収め，本文から各の単語に関係する番号を参照させた。（但し，語源に諸説あるものについては番号の注記を省略した。）

なお，アクセントの法則を考える場合，語は次のように分類される。

単純語――複合していない語で，それ以上小さな語に分けられないようなもの。
〔例〕　木，葉，五，秋，雨，風，草，七，物，桜，クリーム，言う，見る，上がる，晴れる，青い

癒合語――複合の度合がもっとも強く，もとの語のアクセントの影響があまりみられないようなもの。
〔例〕　青葉，七くさ，秋物，秋晴れ

結合語――複合の度合が中間で，もとの語のアクセントによって定まるもの。

複合語
〔例〕 葉桜，七草がゆ，雨上がり，七五調，アイスクリーム，晴れ上がる，青白い，物すごい

接合語――複合の度合がもっとも弱く，前部の語のアクセントを生かす傾向があるもの。

〔例〕 木の葉，青い鳥，我が子，雨風（あめかぜ），七つ八つ，物言う，見て取る

転成語――主として和語の単純語が，形を変えて，他の品詞及び他の用法に転じるもの。もとの語のアクセントによって定まるものが多い。

〔例〕 晴，上がり，光，鮨（すし），見える，細める，暖かい，喜ばしい，黄色い，甚だしい

分離語――前部の語と（中部の語）後部の語が複合せず，息の切れめがあって，それぞれのアクセントをそのまま生かすもの。

〔例〕 秋の七草，奥の細道，春一番，猫も杓子も

付

アクセント習得法則目次

音韻とアクセントとの関係の法則…………(6)

a. 特殊な拍とアクセントとの関係………(6)
b. 二重母音の拍とアクセントとの関係…(6)
c. 母音の無声化する拍とアクセントとの関係……………………………………(8)
d. 音変化並びに拍数変化とアクセントとの関係……………………………………(9)

東京アクセントの習得法則…………………(10)

0 名詞の一般について……………………(10)
1．和語の単純名詞…………………………(12)
2．転成名詞――動詞からのもの…………(13)
3．転成名詞――形容詞その他からのもの……………………………………………(13)
4．名詞＋和語名詞 の癒合名詞 …………(14)
5．動詞・形容詞などとの和語の癒合名詞……………………………………………(16)
6．漢語の単純名詞…………………………(17)
7．後部が漢字一字一拍(漢字音)の癒合名詞……………………………………………(18)
8．後部が漢字一字二拍(漢字音)の癒合名詞……………………………………………(19)
9．外来語の単純名詞………………………(20)
10．省略語・倒置語…………………………(20)
11．畳　語……………………………………(21)
12．後部が和語名詞でできた結合名詞……(22)
13．後部が動詞・形容詞などでできた結合名詞……………………………………………(24)
14．後部が漢語一字の結合名詞……………(25)
15．後部が漢語二字の結合名詞……………(26)
16．後部が外来語の癒合・結合名詞………(27)
17．三つ以上の語が複合した結合名詞……(27)
18．対照・対立・並立する語の連なった名詞……………………………………………(28)
19．接合名詞…………………………………(29)
20 固有名詞の一般について………………(30)
21．地　名……………………………………(31)
22．姓…………………………………………(33)
23．単純語・転成語の 男・女子名 ………(34)
24．癒合語の 男・女子名 …………………(35)
25．決まった単純語を後部とした男・女子名………………………………………(36)
26．複合語を後部とした 男・女子名 ……(37)
27．複合の人名………………………………(39)
28．会社などの団体名………………………(40)
29．固有名詞の 省略語・対立語・倒置語 …(40)
30 数詞・助数詞の一般について…………(41)
31．結合数詞…………………………………(42)
32．接合数詞…………………………………(43)
33．和語の助数詞がつく場合………………(44)
34．漢字一字の漢語助数詞が，単純数詞につく場合…………………………………(46)
35．漢字一字の漢語助数詞が，結合数詞・接合数詞につく場合…………………………(48)
36．漢字二字以上の助数詞がつく場合……(50)
37．外来語の助数詞がつく場合……………(51)
38．接頭辞・接尾辞の類についた数詞・助数詞の類………………………………………(52)
39．畳語的な数詞　その他…………………(53)
40 動詞の一般について……………………(55)
41．口語動詞の活用形（表 **1**）………………(58)
42．文語動詞について（表 **2**）………………(58)
43．口語の単純動詞…………………………(59)
44．転成動詞…………………………………(59)
45．動詞＋動詞 の結合動詞 ………………(60)
46．形容詞・名詞などの結合動詞…………(61)
47．「ずる」「じる」のつく結合動詞………(62)

48.「する」「す」のつく結合・接合動詞…(62)
49. 接合動詞…(63)
50 形容詞，及び特殊な形の擬声・擬態語の一般について…(64)
51. 文語形容詞について（表 **3**）…(64)
52. 口語の単純形容詞 及び 口語形容詞の活用形（表 **4**）…(66)
53. 転成形容詞…(68)
54. 結合・接合形容詞…(68)
55. 決まった和語の語尾をもつ擬声・擬態語の類…(69)
56. 決まった漢語の語尾をもつ擬声・擬態語の類…(70)
57. 同じ語，または相似した語が重複した三・四拍の和語…(70)
58. 同じ語，または相似した語が重複した二・三・四拍の漢語…(71)
59. 擬声・擬態語を後部とする語…(72)
60 副詞，指示・疑問を表わす語，接続詞，感動詞などについて…(72)
61. 副詞…(73)
62. 名詞・数詞からの転成副詞…(73)
63. 連体詞…(74)
64. 指示・疑問を表わす語…(75)
65. 接続詞…(75)
66. 感動詞…(76)
67. 結合してできた副詞類…(76)
68. 畳語・対立語の形をとった副詞類…(77)
69. 接合してできた副詞類…(77)
70 助詞の一般について…(78)
71. 助詞が名詞類についたもの（表 **5**）…(78)
72. 助詞が動詞の終止形・連体形についたもの（表 **6, 7**）…(79)
73. 助詞が動詞の終止形・連体形以外の活用形についたもの（表 **6, 7**）…(88)
74. 助詞が形容詞についたもの（表 **8**）…(88)
75. 助詞が擬声・擬態語の類についたもの…(88)
76. 助詞が副詞，連体詞，指示・疑問を表わす語，接続詞，感動詞の類についたもの…(89)
77. 助詞が助詞についたもの…(89)
78. 助詞が助動詞についたもの…(89)
79. センテンスや語句の切れめの最後にくる助詞…(90)
80 助動詞の一般について…(90)
81. 助動詞が名詞類についたもの（表 **9**）…(92)
82. 助動詞が動詞の終止形・連体形についたもの（表 **10**）…(92)
83. 助動詞が動詞の終止形・連体形以外の活用形についたもの（表 **11, 12**）…(92)
84. 助動詞が形容詞についたもの（表 **13**）…(97)
85. 助動詞が擬声・擬態語の類についたもの…(97)
86. 助動詞が副詞，連体詞，指示・疑問を表わす語，接続詞，感動詞の類についたもの…(98)
87. 助動詞が助詞についたもの…(98)
88. 助動詞が助動詞についたもの…(98)
89. 助動詞の活用形（表 **14**）…(99)
90 接頭辞・接尾辞などの一般について (102)
91. 程度を表わす接頭辞のついたもの…(102)
92. 敬語・丁寧語について…(103)
93. 接尾辞がついて名詞をつくるもの…(106)
94. 人名及び一般名詞などについて意味をそえるもの…(108)
95. 自立できぬ語がついて，名詞や形容動詞的な語をつくるもの…(111)
96. 接尾辞がついて動詞・形容詞をつくるもの…(112)

文節のアクセントの法則…(113)

97. 分離文節…(113)
98. 接合文節…(114)
99. 結合文節…(115)
文節一覧…(116)

付

音韻とアクセントとの関係の法則

東京語では，次に述べるように，その語の音韻とアクセントの間に密接な関係がある。

これは，**0**～**99**に述べる東京アクセントの習得法則すべてに対して，縦糸横糸の関係でからみあってゆくものであるから，あとの法則をよく理解していただくために，ここに掲げておく。

この“音韻とアクセントとの関係の法則”は，個個の語がなるべく発音されやすいようなアクセントの型をとる法則である。

例えば，**a.b.c.**及び次頁の地図に示すように，東京語を含めた大部分の方言は，独立性の少ない音韻にアクセントの高さの切れめがきた時，アクセントの高さの山を前後にずらす傾向がある。つまり，「日曜日」は法則**12**の，「ふとん干し」は法則**13**のあとにそれぞれ**a.**を添えて，アクセントの高さの山がうつったことを示した。同様に，「習い」「匂い」は法則**2**の，「熱帯魚」は法則**14**のあとに**b.**を，「父」は法則**1**の，「機械」は法則**8**のあとに**c.**を添えた。母音の無声化の地図は省略したが，御自身の発音から チ**チ** は チ**チ** の，キ**カイ** は キ**カイ** からアクセントの高さの山がずれたことを推測していただきたい。せっかくアクセントの習得法則を覚えても，この現象をつかんでいないと，個個の語のアクセントの習得はむずかしいので，まず初めによく理解しておくことが必要である。(但し，「象(ぞう)」「蠟(ろう)」など一字の漢語については注記を省略した。)

a 特殊な拍とアクセントとの関係

引き音(ー)，撥音(ン)，促音(ッ)のような拍はアクセントの頂点がおきにくい。そのため，アクセントの高さの切れめがそこにくると，その位置が原則として前にずれる。

例えば，「電話」+「機」の語は，漢語の結合名詞の法則(**14**参照)により，**デンワキ** のように，前部の語の最後の拍まで高い型になる。同じく「飛行」+「機」は ヒ**コーキ** となるべきものだが，前部の語の最後の拍が引き音のため，アクセントの高さの切れめがおきにくく，前の拍にずれて ヒ**コーキ** となってしまう。同様にして，「日本海」は，法則では **ニホンカイ** になるべきだが **ニホンカイ** に，「三角形」は **サンカッケイ** になるべきだが **サンカッケイ** にと，それぞれアクセントが変化する。以下にあげた例も同様である。

(1) 引き音

(**ニチヨービ** →)**ニチヨービ** (日曜日)

(**ドーソーカイ**→)**ドーソーカイ**(同窓会)

(**コーツーヒ** →)**コーツーヒ** (交通費)

(**ゴジューダイ**→)**ゴジューダイ**(五十代)

(**ゲッキュートリ**→)**ゲッキュートリ**

(月給取り)

▷**トーキョート**(東京都)

ニジューマル(二重丸)

(2) 撥音

(**シンブンシャ**→)**シンブンシャ**(新聞社)

(**セイネンダン**→)**セイネンダン**(青年団)

(**イチバンノリ**→)**イチバンノリ**(一番乗り)

▷**サンネンセイ**(三年生)

コキンシュー(古今集)

(3) 促音

(**ジューイッサイ**→)**ジューイッサイ**(十一歳)

(シ**カッケイ**→)シ**カッケイ**(四角形)

b 二重母音の拍とアクセントとの関係

前の拍の母音といっしょになって，二重母音のように発音される イ，ウ，エ のような拍は，アクセントの頂点がおきにくい。そのため，アクセントの高さの切れめがそこにくると，その位置が原則として前にずれる。

例えば，「記憶」+「力」は漢語の結合名詞の

法則(14参照)により，**キオクリョク** のように前部の最後の拍まで高い型になる。同じく「経済」＋「力」は **ケイザイリョク** となるべきものだが，前部の語の最後の拍が前の母音といっしょになって二重母音のように発音されるため，アクセントの高さの切れめがおきにくく，前の拍にずれて **ケイザイリョク** となってしまう。同様にして，「進水式」は，法則では **シンスイシキ** となるべきだが **シンスイシキ** に，「厚生省」は，**コーセイショー** になるべきだが **コーセイショー** にと，それぞれアクセントが変化する。

同様に，起伏動詞 **オモウ** からの転成名詞は，ヒ**カル**→ヒ**カリ**(光)，**イノル**→**イノリ**(祈り）のように，尾高型 **オモイ** になるべき(2参照)だが，アクセントの高さの山が前にずれて **オモイ** (思い）のように変化する。

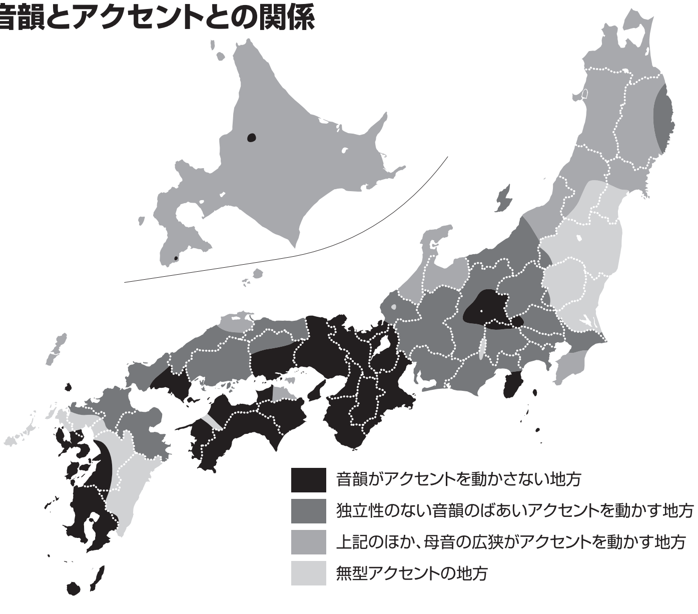
以下にあげた例も同様である。

(**ナライ**　→)**ナライ**　(習い)
(**ニオイ**　→)**ニオイ**　(匂い)
(**カンガエ**　→)**カンガエ**　(考え)
(**ネッタイギョ**→)**ネッタイギョ**(熱帯魚)
(**チガウノデ**　→)**チガウノデ**(違うので)
▷**サンバイズ**　(三杯酢)
ショタイヌシ(所帯主)
マツヨイグサ(待宵草)
タンスイギョ(淡水魚)

注意① 但し，新しい傾向として，複合語の場合に高さの山が前にずれることの少ない人もいる。例えば，**ヤトイヌシ**(雇い主）といわずに **ヤトイヌシ** のように発音する。

注意② 但し，この法則**b.**のために，アクセントのずれた語を複合語の後部とするものは，ずれる以前のアクセントでの複合法則が現われる傾向がある。例えば，「国」＋「境」は，「境」が中高型であるから，和語の結合名詞の法則(12参照)により，**クニザカイ** になりそうなものである。しかし，アクセントがずれる以前の型 **サカイ**(尾高型）が複合した **クニザカイ** の型になる。

音韻とアクセントとの関係



新明解日本語アクセント辞典 第２版 新装版
アクセント習得法則 代表例

目　次

まえがき …………………………………………… 2
アクセント習得法則目次 …………………… 3～5
名詞の型一覧表 ……………………………… 6～7
音韻とアクセントとの関係の法則 ………… 8～9
東京アクセントの習得法則 ………………… 10～69
文節のアクセントの法則 …………………… 70～71
あとがき …………………………………………… 72

第２版新装版にあたって

第２版を新装版とするにあたり，この小冊子では，辞書本冊での修正にあわせて，微細な修正を行いました。また，従来CDに収録していた音声を，三省堂のウェブサイトから，スマートフォンやパソコンなどで，いつでも聞いていただけるようにしました。音声の修正には，朗読講師 松本久美子先生，日本女子大学教授 坂本清恵先生にご協力いただきました。この場をお借りして感謝申しあげます。

代表例の音声は，次のサイトで聞くことができます。

https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/vod/smka2/

右のQRコードを読み取ってサイトに入っていただくこともできます。

なお，この小冊子のご利用にあたっては，２ページの「まえがき」と５ページの「この小冊子のご利用にあたって」をお読みください。

これまでと同様，読者の皆さまにご活用いただけましたら幸いです。

2024年12月20日　　三省堂編修所

まえがき

この小冊子は、辞典本冊の末尾につけられている「アクセント習得法則」から代表例を抜き出して示したものである。単語を単独で示すことは不自然でもあり、ここでは紙面65ページ以内という制約の中で、なるべくセンテンスにして示すように心がけた。発音及びアクセントの表記については本冊の「この辞典を使う人のために」（*7*ページ～）をご覧いただきたい。

よく電話でご質問のある“→”のあとの **0**～**99**の番号は何かということだが、これは巻末の「アクセント習得法則番号」を示している。これで日本語すべての法則を示せるわけではないが、大まかなところはお分かり頂けると思う。

この辞典で示した発音及びアクセントは、東京の標準語といわれているもので、幾通りものアクセントが行われている場合は、二通り、三通りのアクセントを示してある。古いアクセント《古は…》や、新しいアクセント《新は…》が分明な場合はそれも示した。ただし、地方の固有名詞などのアクセントはいちいち示さない方針をとった。例えば、東京では「前橋」は**マエバシ**というが、地元では**マエバシ**であるなど。

また、東京語には「音韻とアクセントとの関係の法則」がある。本冊の（6）ページ以降をご覧頂きたい。特に「母音の無声化する拍とアクセントとの関係の法則」は無声化しない方には聞きとりにくいと思う。その他「ガ行鼻音」もカ行の片仮名に“ ゜ ”を付したが、既に若年層では衰退しつつある。本冊の解説（*23*ページ）を参照して頂きたい。

なお、この小冊子の習得法則番号の見出しに（音声）と示してあるものは、そこに掲載した代表例を読み上げた音声を、三省堂のウェブサイトで聞くことができるようにした。ただし、一覧表にしている箇所は、表中の語をすべて読み上げるのではなく、* を付けた語のみを読み上げた。例えば小冊子46ページ表**5**の「名詞＋助詞」では、***ウシ**（牛）、***ウシカ゚**、***サクラ**（桜）、***サクラカ゚** のように。

小冊子の例と合わせ音声を聞いて頂ければ幸である。

音韻とアクセントとの関係の法則

a　特殊な拍とアクセントとの関係　音声

引き音(ー)，撥音(ン)，促音(ッ)のような拍はアクセントの頂点がおきにくい。そのため，アクセントの高さの切れめがそこにくると，その位置が原則として前にずれる。

(1)引き音

(ニチヨービ　→)ニチヨービニ　カエル（日曜日）
(ドーソーカイ→)ドーソーカイニ　デル（同窓会）
(コーツーヒ　→)コーツーヒオモラウ（交通費）
(ゴジューダイ→)
ゴジューダイニ　ナッタ（五十代）
(ゲッキュートリ　→)
ゲッキュートリニ　ナル（月給取り）
(トーキョート→)トーキョートノウマレ（東京都）
(ニジューマル→)ニジューマルオモラウ（二重丸）

(2)撥音

(シンブンシャ　→)シンブンシャノヒト（新聞社）
(セイネンダン　→)
セイネンダンニ　ハイル（青年団）
(イチバンノリ　→)イチバンノリダ（一番乗り）
(サンネンセイ　→)サンネンセイガイル（三年生）
(コキンシュー　→)コキンシューオ　ヨム（古今集）

(3)促音

(ジューイッサイ→)
ジューイッサイニ　ナッタ（十一歳）
(シカッケイ　→)シカッケイダ（四角形）

b　二重母音の拍とアクセントとの関係　音声

(ナライ　→)ナライ，セイトナル（習い）
(ニオイ　→)ニオイガスル（匂い）
(カンガエ　→)カンガエガアル（考え）
(ネッタイギョ→)ネッタイギョオ　カウ（熱帯魚）
(サンバイズ　→)サンバイズオ　ツクル（三杯酢）
(ショタイヌシ→)ショタイヌシト　ナル（所帯主）
(マツヨイグサ→)マツヨイグサガサク（待宵草）
(タンスイギョ→)タンスイギョガ　オヨグ（淡水魚）

c　母音の無声化する拍とアクセントとの関係　音声

(チチ　→)チチガイル（父）
(キテ　→)キテクダサイ（来て）
(キシャ　→)キシャニノル（汽車）
(シケン　→)シケンニ　ウカル（試験）
(フサコ　→)フサコサン（房子）
ピクピク　→ピクピクスル

d　音変化並びに拍数変化とアクセントとの関係　音声

Ⅰ　音変化

拍の数は変らないが，音の変るもの。

サジ　を　→シャジ（匙）
シンジュク　を　→シンジク（新宿）
アタタカイ　を　→アッタカイ（暖かい）
シゴニチ　を　→シゴンチ（四五日）
オマエ　を　→オメー（お前）
ワタシワ　を　→ワタシャー（私は）
シラナイ　を　→シラネー（知らない）
ヤリナサイ　を　→ヤンナサイ（遣りなさい）
オカエリナサイ　を　→オカエンナサイ（お帰りなさい）
ベッド　を　→ベット（bed）
ハンドバッグ　を　→ハンドバック（handbag）

Ⅱ　拍数変化
(1)音は変らず，ちがう拍の加わるもの。
セ　を →**セー**(背)
トビ　を →**トンビ**(鳶)
アマリ　を →**アンマリ**(余り)
イシコロ　を →**イシッコロ**(石塊)
シャバケ　を →**シャバッケ**(娑婆気)
トガル　を →**トンガル**(尖る)
(2)音はほとんど変らないが，拍の数の減るもの。
ニンギョー　を →**ニンギョ**(人形)
ダイコン　を →**ダイコ**(大根)
ニョーボー　を →**ニョーボ**(女房)
ダイジョーブ　を →**ダイジョブ**(大丈夫)
ワタシャー　を →**ワタシャ**(私は)
オショーサン　を →**オショサン**(和尚さん)
Ⅲ　音及び拍数変化
コンニチワ　を →**コンチワ**(今日は)
キミノウチ　を →**キミンチ**(君の家)
ヤッテオク　を →**ヤットク**(遣っておく)
モチアゲル　を →**モチャゲル**(持ち上げる)
シンデシマウ　を →**シンジマウ**，**シンジャウ**(死んでしまう)
ファン　を →**フアン**(fan)

注意１　具体的な発音　(音声)

二拍めから上がる語で，第二拍が引き音や撥音，二重母音副音の場合，無造作な発音の折や個人によって第一拍から高くなることがある。
トーキョー　→**トーキョー**(東京)
シンブンシャ　→**シンブンシャ**(新聞社)
カイシャ　→**カイシャ**(会社)
具体的発音では，促音はその前の拍と同じ高さを保とうとする。
ゲッキュー　→**ゲッキュー**(月給)
ハッキリ　→**ハッキリ**
イッサイ　→**イッサイ**

注意２　具体的な発音　連濁　(音声)

複合の度合が比較的弱いものは連濁しにくい。
ク**サキモネムル**(草木)
ウエシ**タニ　ナル**(上下)
ミキ**キオスル**(見聞き)
タカヒ**クガ　アル**(高低)
トリカエル(取り替える)
フリカエル(振り返る)
ニジューシ**チニ　ナル**(二十七)
ヒ**ト**ツ**キガ　タツ**(一月)
コロコロ　サラサラ　トントン